

注意！

■この記事は発行年月日時点の内容のまま公開していますので、ご覧になった時点の法規制(農業使用基準等)等に適合しなくなった内容を含む可能性がありますから、利用にあたってはご注意ください。

農作物技術情報 第6号 野菜

発行日 平成21年 8月27日
発行 岩手県、岩手県農作物気象災害防止対策本部
編集 中央農業改良普及センター 県域普及グループ (電話 0197-68-4435)

携帯電話用 QR コード



「いわてアグリベンチャーネット」からご覧になれます
パソコンからは「<http://i-agri.net>」 携帯電話からは「<http://i-agri.net/agri/i/>」

ハウス果菜類	草勢維持と障害果の発生防止
露地きゅうり	摘葉と病害防除の徹底、台風への備えも万全に
ほうれんそう	秋雨、台風への備えを万全に
露地葉茎根菜類	収穫率向上のための適切な管理と病害虫防除

1 生育概況

- (1) きゅうりは露地栽培では収穫ピークを迎えたことと低温、日照不足の影響で草勢低下がみられ収穫量が減少しています。病害虫では褐斑病や炭そ病、べと病、ホモプシス根腐病、ハダニ類のほか、低温の影響から一部で黒星病の発生も見られます。ハウス抑制栽培では生育は概ね順調です。
- (2) トマトの雨よけ栽培は日照不足により着色が進まないほか、草勢低下や落花もみられました。また、果実は小玉傾向で裂果や灰色かびがやや多い傾向です。
- (3) ピーマンのハウス栽培では日照不足や成り疲れ、気温の低下から果実肥大が緩慢です。病害虫では斑点病やアザミウマ類の被害がみられます。露地栽培でも夜温の低下に伴い果実肥大が緩慢です。
- (4) 雨よけほうれんそうは7月後半からの日照不足の影響もあり細めの株が多くなりましたが、回復傾向です。
- (5) レタス、キャベツでは、天候不順により裂球や小玉が多くなり、収穫、定植作業の遅れも見られました。また、収穫の遅れから腐敗性病害の被害を増長しているほ場も見られます。
- (6) ねぎの収穫は順次行われていますが、天候不順の影響でやや細めの生育となっています。アザミウマ類や黒斑病、さび病等の病害虫の被害がみられます。

2 技術対策

(1) 果菜類(トマト・ピーマン)

ア ハウス果菜類

今後秋雨前線が活発になるとハウス内が過湿になりますので、十分な換気を行うことが重要です。また、病害虫の防除にはくん煙剤を使用する等、湿度を上げない工夫が必要です。

気温が低下してくることから、ハウス果菜類では夜間の保温が必要となります。最低気温がピーマンでは17℃、トマトでは10℃の時期をめどに保温を開始します。

イ 雨よけトマト

裂果の発生が増えつつありますが、土壌水分の急激な変化を起こさないよう少量多回数のかん水管理とします。ハウス外からの雨水の横浸透にも留意し、ハウス周囲の明きょを再確認しましょう。

また、主枝摘心後は半放任とし、果実に直射日光が当たらないようにします。

病害では今後、灰色かび病や葉かび病、疫病の発生が懸念されるので、これら病害に効果のある薬剤を選択し、防除に努めてください。

本年は日照不足等の影響から、例年より収量が少ない圃場もみられますが、少しでも収量を確保するために、通常栽培終了時に未収穫となる果実を収穫することも検討しましょう。

方法は、9月末から10月初めまでの間に写真のように葉を全て摘んだ後、霜が降りる前につる下げし、不織布をべたがけします。低温や霜の影響が回避され、収穫可能な果実が増加するとともに、裂果の発生を減らすことができます。



ウ ピーマン

ハウスピーマンの主枝摘心は9月初めまでに実施します。ハウス・露地とも尻腐果等はおさまってくるものと思われませんが、気温の低下とともに黒変果の発生が増えてきますので、ハウス栽培では保温管理に努めてください。

露地栽培では、斑点病中心の防除が必要です。

(2) 露地きゅうり

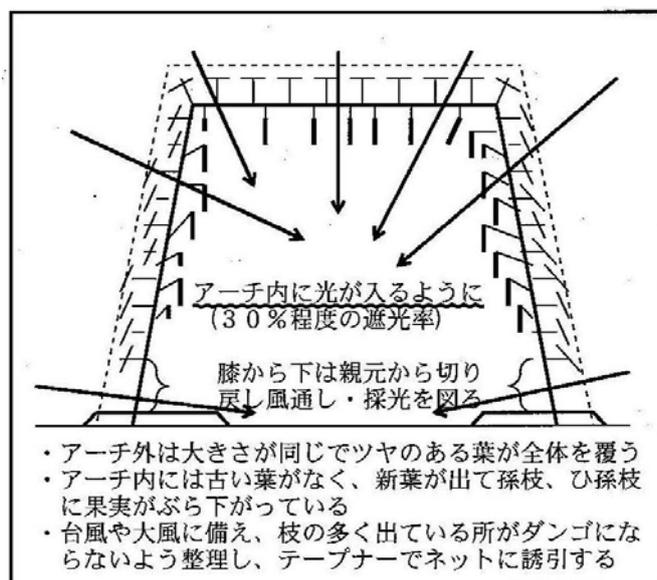
草勢低下が著しい圃場では、不良果の摘果に努めて草勢回復を図るとともに、摘心はアーチの外側に飛び出しているところを指先で止める程度にとどめます。

ただし、強風により側枝がもまれ、茎葉の重なり合っている部分は、混み合って病害虫の発生源となる恐れがあるため、適度に摘心する必要があります。

摘葉は、生育後半でも太陽光がアーチ内部に十分入り込み、新葉が常に発生するように右図を参考に行います。

さらに、草勢回復には液肥を薄い倍率で葉面散布することや土壌かん注も有効です。気温も徐々に低下しておりますので、追肥は速効性の資材を利用するようにします。

病害では今後、褐斑病、炭そ病、べと病の増加が懸念されるので、これら病害に効果のある薬剤を選択し、摘葉作業と併せながら効果的な防除に努めます。特に、アーチの上部に病害がまん延しないように防除に努め、病葉は早めに摘葉してください。



(3) 雨よけほうれんそう

天候不順の影響により株が細めで、葉色もやや薄めでしたが、回復傾向にあります。

気温の低下に伴いほうれんそうの生育には適した条件となりますが、品種によっては気温の低下により生育が大幅に遅れる場合がありますので、各地域で示されている作付品種体系に従い適切な品種をは種しましょう。

萎凋病等の土壌病害が多く見られた圃場では、次年度以降の対策として土壌消毒の実施を検討しましょう。初夏に土壌消毒する従来の方法以外に、作付終了後の晩秋に土壌消毒を行う方法もあります。具体的な方法については、最寄りの農業改良普及センター等にご相談下さい。

今年度、土壌消毒を実施した圃場では、未消毒の土壌が混和して消毒の効果が早期に低下しないように注意しましょう。また、収穫後の圃場には根や残渣を残さない様にしましょう。本年度の栽培期間も残り少なくなってきます。

今栽培しているほうれんそうの生育が不揃いで収穫期間が長引く場合には、無理せず収穫を切り上げ、次作の作付け準備をしましょう。

気温の低下や秋雨の影響でハウスを閉める時間が長くなると、べと病の発生も多くなります。抵抗性品種を利用している場合であっても、日中は積極的に換気して病害が発生しにくい環境にしましょう。

台風の影響を受けやすい時期になります。屋根ビニールが破損したり、ハウス内に雨水が流入するのを防止するためビニールの破れの補修、ハウス周りの排水対策を再度確認します。

(4) 露地葉菜類

ア ネギ

天候不順の影響で管理作業がやや遅れている圃場が見られます。最終土寄せをした後の日数が長くなると葉鞘部のしまりが悪くなる等して品質が低下します。収穫の20～30日前を目安に最終培土を行いましょう。

ネギアザミウマの被害がやや多めです。黒斑病やべと病、葉枯病の発生も見られてきています。収穫が近くなってからの病害虫被害は品質の低下に直結しますので、早めの防除を心がけましょう。なお、農薬の使用にあたっては収穫前日数を確認して適切に防除しましょう。

イ キャベツ・レタス

高冷地の定植作業はほぼ終了しています。今後は収穫率が向上するように生育中の栽培管理をしっかり行いましょう。

まとまった降雨により腐敗性の病害が多くなりますので、圃場排水を確認し、降雨後の防除が円滑に行えるようにしましょう。また、収穫終了後の廃棄株や残渣は放置せず、病害虫の発生源とならないように注意しましょう。

ウ アスパラガス

普通栽培および立茎栽培のアスパラガスは、地上の茎葉部に存在している養分が地下部へ徐々に移行する時期となります。これからの追肥は養分転流の妨げになりますので行いませんが、茎葉部を健全に保つことが株養成には重要です。倒伏防止対策をしている場合には、台風などに備えてもう一度ネットや誘引線の確認を行いましょう。

伏せ込み促成アスパラガスの株養成においても、茎葉部を健全に保つことが収量向上につながります。病害を防除し、倒伏させずに自然に茎葉が黄化するよう心がけましょう。



フラワーネットを利用した倒伏防止している圃場の例

農作物技術情報第7号は9月25日(木)発行の予定です。
気象や作物の生育状況により号外を発行することがあります。
発行時点での最新情報に基づき作成しております。
発行日を確認のうえ、必ず最新情報をご利用下さい。

9月15日～11月15日は秋の農作業安全月間
急ぐより 家族の笑顔を大切に 想う心で ゆとりの仕事